

Title	ジェネティック・アーカイブ構築のための基本的歴史概念(ジェネティック・アーカイブ・エンジン: デジタルの森で踊る土方巽)
Sub Title	
Author	鷺見, 洋一(Sumi, Yoichi)
Publisher	
Publication year	2000
Jtitle	Booklet Vol.6, (2000. ) ,p.3- 10
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000006-04394198">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000006-04394198</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ジェネティック・アーカイヴ構築のための 基本的歴史概念

鷲見 洋一

## COE

本特集は慶應義塾大学アート・センターがここ数年来手がけてきた「アーカイヴ」企画を基本主題とするものである。この企画は、1996年から慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスを中心に、文部省の大型科学研究費「中核的研究拠点形成計画」（通称COE）の助成を得て、5年計画で進められてきた共同研究「創造的デジタルメディアの基礎と応用」の一員として、アート・センターが着手した「ジェネティック・アーカイヴ・エンジン」プロジェクトに端を発している。「ジェネティック・アーカイヴ・エンジン」プロジェクトは、総合大学としての本塾大学の特質を最大限に活かした、諸分野の専門研究者によるコラボレーションに基礎を置くもので、理論部門、応用部門、技術部門の3部門に分かれる。理論部門では図書館情報学を専門とする所員を中心としたスタッフがアート・ドキュメンテーションの基礎的な諸問題を検討している。応用部門では特定の資料体を対象に、それぞれ文化系の研究領域を専門とする所員たちがチームを組み、主題別のアーカイヴ構築に着手しており、目下、土方巽、イサム・ノグチ、瀧口修造、博物図鑑という4つの主題で作業が進行している。技術部門は、理工学部所属の所員が担当し、応用部門で蓄積された膨大なデータを、柔軟で即応性の強い「半構造」システムに流し込んで、データ・ベースを構築する作業を理論と実践の両面から進めている。

年次毎の詳細な研究経過は、湘南藤沢キャンパスで独自に編集・刊行されている報告書各号に掲載されているが、本特集号では以上に紹介した部門のうち、応用部門の主題別アーカイヴ構築、とりわけ舞踏家土方巽のアーカイヴに携わる関係者数名と、技術部門のスタッフとが、それぞれの立場から執筆し、我が国ではほとんど存在しないに等しいアーカイヴなる制度ないし組織の基本的な仕組み、その今日的存在意義について、重要な問題提起と現状報告を行うものである。この巻頭の小論で、筆者は一文学研

究者としての立場から、ジェネティック・アーカイヴ構築に際して押さえられるべき若干の基本概念を、ヨーロッパ文化史、思想史の観点から整理しておきたいと思う。

### アーカイヴとNDC

アーカイヴとは特定の主題（ないし人物）に関する一次資料（そして本プロジェクトのような研究アーカイヴの場合はさらに研究論文などの二次資料）を収集・整理・保存・管理する機関のことである。研究アーカイヴにおいては、従来図書館が行ってきているような十進分類法に基づく資料の整理や分類はほとんど意味をなさない。

十進分類法は、ペーコンなどが確立したいわゆる学問分類に増殖増大する書物を当てはめることが困難になってきた状況を踏まえて、デューイが1876年に考案した記号システムであり、書物の分類と書架の分類とを一致させて、開架図書館での検索を容易にする画期的方法だったが、日本においてはこれをモデルに、森清が1929年に「日本十進分類法」(略号 NDC)を案出した。NDCの構成は(0)総記、(1)哲学、(2)歴史、(3)社会科学、(4)自然科学、(5)工学・技術、(6)産業、(7)芸術、(8)語学、(9)文学であり、現在多くの大学図書館などがこの分類システムを採用している。その結果、NDCは日本の研究者の行う主題把握や観念連想に対して絶対的とも言える強制力をふるい、そればかりか大学キャンパスでは書籍の購入や、研究室の配備、はては学部人事の配分方式にまで、その有形無形のインパクトは及んでいると言っても過言ではない。

研究アーカイヴが採用する分類方式は、決してNDCのような固定的なものではなく、対象とする資料体の特性に応じて、柔軟な適応をする。それはアーカイヴが扱う資料体に、書籍以外の資料（極端な場合は芸術家が収集した石や瓶、愛用した杖、ライターなど）が必然的に含まれてしまう事情も大いに関係するが、さらに強調しなければならないのは、往々にしてアーカイヴの分類方式が領域横断的な特性を帯び、複数のジャンルや分野に跨って作品の記述や分析が行われることであろう。だが、こうした既成の分類システムとの対比や比較からは、アーカイヴが本来持っている奥深い特質はなかなか見えてこない。以下に略述するのは、本アート・センターが構築しつつある新機軸の研究アーカイヴの基本構想を支える歴史観、芸術観のあらましである。

### 記憶術

筆者は1998年から1999年にかけて、「即興」に関する領域横断的な研究会を組織し、その研究活動の一環として、フランスの詩人ジャック・ルーボーを招いて公開の談話会を開催した。その席で筆者を驚かせたのは、ルーボーが1時間以上にわたって「記憶術」の重要性を語り、14行詩ソネットの即興制作にあたり、記憶術の習得がいかに詩人の「靈感」や「感興」を

充実させ、促進するかを熟っぽく強調して止まなかった事実であった。通念上は、知識の機械的暗記に繋がる記憶と、偶然性や自発性に重点が置かれる創造的即興行為とは、根本的に相容れない筈であるが、両者は深いところで共通の地下水脈に繋がっているとでも、ルーポーは言いたげであった。

フランセス・A・イエイツ『記憶術』（玉泉八州男監訳、水声社）とメアリー・カラザース『記憶術と書物——中世ヨーロッパの情報文化』（別宮貞徳監訳、工作社）は、私たちが現在日本で入手しうる、「記憶術」に関する最上の参考文献であるが、この2冊を繙くと、詩人ルーポーが強調する記憶術と創作行為との深い連関のみならず、現代における研究アーカイヴの基本問題のほとんどが「古代記憶術」の広大な問題圏域にすっぽりと包摂されてしまうことが明らかになる。

そもそも記憶は「場」と「イメージ」から成り立っている。「場」とは、たとえば蠟引き書板であったり、人気のない広場や巨大な建築物の内部であったりする。イメージは2種類あり、「事柄」と「言葉」に分かれる。古代記憶術は、対象とする「事柄」ないし「言葉」のイメージを特定の「場」に張り付け、両者の結合の特徴的な相を手掛かりにして、「覚える」のである。ルーポーの話では、家屋の内部構造に即して、詩句を暗記する詩人もいたという。従って古代記憶術において決定的に重要なのは必ずしも「事柄」や「言葉」そのものではない。「事柄」や「言葉」が張り付けられるべき「場」の「記憶」それ自体が死命を制するのである。ひとたびその「場」が獲得されれば、そこに張り付けて記憶される対象の件数は驚くべき規模にのぼる。ある時代に特徴的な「場」のシステムというものがあり、それはつまるところ、その時代を深層で規定している宇宙論や世界観に支配されている。こうして記憶術はそれぞれの時代性を刻印され、微妙に「場」の構造を変化させながら、ルネッサンスから17世紀あたりまで生き延びたのであるが、当然のことながら、15世紀のグーテンベルクによる印刷術の発明この方、人間は自分の外部に書物という記憶の「場」を創出し、おのれ内部の記憶術を衰退させたのであった。

### ゲスナー

NDC分類はあらゆる書物から著者に関する情報を消し去って、書物を一個の閉じられた最終単位と見なして分類整理する。ところが、1545年に刊行された目録学・書誌学の草分けともいえるコンラート・ゲスナーの『書誌総覧』は、そうした近・現代の洗練された整理学を知らない雑多な情報の坩堝<sup>るつぼ</sup>であり、古代記憶術との深い関連の相の元に置かれた興味深い著作になっている。これは注釈付図書目録で、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語で書かれたすべての書物の網羅を目指すシリーズの第1部をなす。『書誌総覧』すなわち、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の3カ国語で書かれた書物すべての内容豊富な目録。これらの書物は我われの世代にまで伝

図1 プリニウス『博物誌』、1554年版（初版1535年）より、カメルス作成になる「索引」。ゲスナーをはじめ、およそあらゆる博物誌の祖といえる書物。原著者は西暦23年生まれだが、印刷術発明後、アリストテレスの『動物誌』と並んで各地で様々な版本が出た。

えられたもの、失われたもの、古典から現代にいたるまでのもの、知識人によるもの、識者でない作者によるもの、出版されたもの、未発表のまま図書館に埋もれているもののすべてを含む。 チューリヒの医師コンラート・ゲスナー著』（ハンス・フィッシャー『ゲスナー』今泉みね子訳、博品社、1994年、p.218）というのが正式のタイトルであるが、数万点にのぼる著作目録にすべての著述家の略歴資料を付した著者名索引（3千人）が付き、総合的学者人物伝、著述家事典になっているばかりか、各書物の内容の要約、抜粋や、序言の内容までが収録されるという凄まじさである。ゲスナーの著作には、明確に意識されてはいないが、世界を一冊の書物（外在化された脳髄）に納めきってしまおうとする古代記憶術の方法が色濃く影を落としているように思われる。その場合、各書物を静態的な分類システムに封じ込めてしまわず、書物の背後に潜み隠れる「著者」にまで思いを巡らせ（ゲスナーはヨーロッパ各地を旅して、著者を訪問し、インタビューして歩くことまで辞さなかったと言われる）、書物から著者へ、また別

の書物へと検索範囲を広げていく、まことに今様の研究アーカイヴの活動に相応しい調査を続けた。

### 18世紀のカタログ性

書誌学者ゲスナーを、そのもっとも体系的で包括的な本質において継承するのが18世紀である。18世紀人、とりわけブルジョワジーの階層の人々は几帳面である。彼らはきれい好きであり、身の回りのくさぐさのみならず、思惟や知覚のあらゆる対象物の整理・配置・列举を心掛けていた。18世紀の人々が生きていくためのよすがとした頼もしい味方は「理性」である。思弁的で構築性の強い17世紀のデカルト的理性と違って、18世紀の理性は人間を中心に置いて融通性に富み、感性や情動さえもあえて養分にしてしまうような、話の分かる理性である。この時代の文学がみな「理性の申し子」であるというのは、こうした事情を踏まえている。

語学事典の数々、理性を駆使した思惟・知覚の対象分類（哲学書）もさることながら、この整頓熱は人間生活の全領域にまで広まっていく。そうした営みの中でも「網羅」や「収集」に重点が置かれたものに、各種のテーマ別事典類がある。一方、自然界の膨大な対象物のある秩序や法則の支配下に置いて系統づけようとする、より理性的な試みがある。スウェーデンのリンネは二分法という分類法で植物を分類して一世を風靡した。突飛な飛躍と叱られるかもしれないが、フランスの大作曲家ラモーが近代和声学を確立して、音の組み合わせを組織化し、体系づけたのも同じ流れの中で考えることができるかも知れない。

図2 リンネ『植物学書』、1751年（初版）より、図版「葉の分類図」。

18世紀人にとっての世界像は、それゆえカタログであった。理性の申し子であるはずのこの時代の文学も、人間生活と人間心理の総目録といった様相を呈してくる。マリヴォー劇は恋愛心理のさまざまな変化や様相に関する精緻なカタログであるし、メルシエの『タブロー・ド・パリ』は大都市の明暗や裏表をくまなく記述したテーマ別事典と見なすこともできよう。言うまでもなく、サドを始めとしてこの世紀に書かれたおびただしい数にのぼる小説群も、19世紀のバルザックやスタンダールを待つまでもなく、そうした収集熱と解析趣味の行き着く果てに展開する架空の図録に他ならない。

そうした総合カタログの方向の極北に位置づけられるのが、言うまでもなくディドロ・ダランベールによる『百科全書』であった。『百科全書』の本文17巻は、数百名にのぼる協力者が執筆した膨大な数の項目をアルファベット順に並べたものであるが、事典の基本原則である人間知識の系統図(第1巻巻頭に提示されている)の秩序と恣意的なアルファベット順とをどう折り合わせるかは、編集上の大問題であった。アルファベット順は8,9世紀のラテン語辞典あたりから姿を見せはじめ、16,17世紀の外国語辞書全盛時代になってヨーロッパに定着したが、当然ながらまったく恣意的な順番でしかない。この恣意性を打破する手立てとしてディドロたちが採用したのが、「参照」という方法であった。「参照」とは各項目の冒頭や末尾、場合によっては途中に、類似の内容を持つ他の項目名を適宜挿入し、読者の

図3 『百科全書』、本文第1巻、「人間知識の系統図」(部分)。「記憶」が司る「歴史」の諸項目を網羅している。

読みを遠隔操作により秩序立てるというものである。項目の見出し語の次に置かれた単語は、「犬」に対する「哺乳類」という具合に見出し語の上位概念を示して、体系への組み入れを図るためのものであるし、また項目の途中や末尾に登場する単語はもっぱら同位概念ばかりで、これによって読者はアルファベット順とは違った経路を辿らされることにより、いつしか人間知識系統図の全円性を認識することもできる訳である。「参照」は、アルファベット順という辞書が宿命的に背負い込む「連辞性」を打ち破って、読み手の思考や創造を自由に飛躍させる「範列性」の読書を可能ならしめる便利な知的戦略であった。

### 範列性

そもその昔、書物はその形状変化の過程で、線型読書（連辞型）を前提とした巻物式（volumen）から、縦横の検索を本質とする読書（範列型）の可能な綴じ本式（codex）への移行を経験しながら、依然として読み手に勝手な連想や飛躍を禁じる線型読書を強制してきた歴史がある。上記のゲスナーの功業は、そうした書物の専横をカタログ化というメタレヴェルの分類作業を通じて抑制する効力を発揮した。誰でもゲスナーの『書誌総覧』を手にする者は、記述されている個々の書物の線型（連辞型）特質を超えて、書物同士、はては著者と書物、あるいは著者同士が横断的に連動し、関係し合う架空のネットワーク構築を体験できるのである。

古代から近世にかけてあらゆる知の構築作業を支配した記憶術は、さらにそれ以上の強力な抵抗を書物に對置する。フランセス・イエイツの調査では、記憶術を身に付けた人間は軽く十万件ぐらいの知識を暗記できたというから、これは現代のフロッピー・ディスクの容量など遙かに超えた凄さである。近代の百科事典が線型書物の宿命からしてまったく恣意的なアルファベット順を採用せざるをえないのに対し、記憶術によって頭脳に蓄積された知識の総体は特定の宇宙論の論理や基準で整理されているから、まさに範列型の検索によってしか利用できないし、またそういう利用をしなければまったく意味がない。前述のフランス『百科全書』の分類システムは、その意味では伝統的記憶術の近代社会における新たな蘇生とも解釈できるだろう。いや、それ以上に、古代記憶術はほとんどパソコンで作成した巨大データベースの可能性に近い起爆力を秘めている。歴史は繰り返すというが、「古代記憶術」はケケロやライブニッツなどが思いも及ばなかったデジタル・メディアを媒介にして、今や復活しつつあると言える。

この間の事情を研究アーカイブの構築論理として定式化してみると、私たちが過去の記憶術やゲスナー、あるいは『百科全書』といった先例に学ぶべきは、「作品」や「書物」を十進分類式のスタティックな概念の枠組みに幽閉することなく、それらを解放して、「作者」や「時代」、はたまた「間テキスト性のネットワーク」や「隣接概念」や「イメージの連関」などの広大な脱制約的空間へと「飛躍」、「逸脱」させうる遊びやゆとりを、研



究対象とする資料体に保証してやるということに尽きるのではないだろうか。

## 生成

静態的分類の本質は時間軸における生成（すなわちあらゆる生命現象の本質）を拒み、資料をある抽象的空間に固定するという宿命を持つ。一方、アーカイヴの本質の一つは、資料の時間的把握、すなわち作品や個人の生命体としての生成発展の相にこだわり続けるということにある。それゆえ私たちのアーカイヴでは、ドローイング、メモなどの「未定稿」などをも収蔵品として扱い、成長する作品や進歩したり逸脱したりする主観性それ自体を考察の対象とする。

その点、1970年来のフランスにおける文学を中心とした「生成批評」の目覚ましい進展から、私たちが学ぶべきものは多い。60年代の構造主義から生まれた「テキスト理論」は、母胎である構造主義に決定的に欠落していた時間性を回復し、どちらかという形態に関する共時的関心に裏打ちされ、空間的隠喩を駆使してきた構造分析を、作品の生成過程や通時的なエクリチュール現象に向けさせ、ついには「決定稿」の独裁を揺るがすような「手稿」や「未定稿」への強い関心を呼び覚ますことになった。その結果、批評家の眼差しは「著者」から「作家」へ、「書かれたもの」から「書かれつつあるもの」へ、「構造」から「過程」へ、「作品」から「生成」へと好んで注がれるようになったのである。構造主義が文学テキストをシステムの内的な関係性の機能として記述する方法が、ここでは生成の最終到達点である「作品」概念への反措定として働き、場合によっては伝記的、心理的「著者」を排除してまで、草稿を対象とした流動する書法や編集のプロセスのみの分析を際立たせることに寄与したのである。

文学研究として確立した草稿研究の生成批評を、他ジャンルに応用する試みも重要である。条件はただ一つ、対象となる制作活動が生成過程を証拠立てる資料を残してくれていることである。その点、文学作品に隣接する哲学著作の草稿、法律や政治に関わる文書の未定稿、作曲家や画家のスケッチ、建築家の設計図などはアーカイヴでの研究に相応しいコーパスと言えるだろう。アート・センターが目下構築中の研究アーカイヴの中でも、舞踏家土方巽、画家・詩人・評論家の瀧口修造という二人の横断的なアーティストは、上述の生成批評がもっとも効率よく適用されうる格好のコーパスを提供してくれていると言えるであろう。

（すみ よういち・慶應義塾大学文学部教授／フランス文学、アート・センター所長）